

4 Churg-Strauss 症候群が疑われる喘息患者の1例

浅川 友美・斎藤 智久

下越病院呼吸器内科

症例は60歳台, 女性.

【主訴】鼻閉, 湿性咳嗽, 呼吸困難.

【既往歴】56才脂質異常症, 60才腰椎ヘルニア, 65才慢性副鼻腔炎. 気管支喘息の既往なし.

【生活社会歴】飲酒・喫煙: 無 アレルギー: 無 ペット飼育: 無.

【現病歴】2010年8月頃から咳嗽, 水溶性鼻汁が続くことがあり, 耳鼻科受診していた. 2011年8/4より乾性咳嗽, 喘鳴, 手掌・背部・四肢に掻痒を伴う発疹が出現, その後も鼻閉感・呼吸困難著明で, 症状増悪し8/6当院入院となった.

【身体所見】身長149cm, 体重44kg, 体温38.1℃, 血圧135/82mmHg, 脈拍121/分, SpO₂93% (room air) 意識清明, 貧血黄疸なし, 心雑音なし, 吸気時喘鳴著明, 湿性咳嗽, 強い鼻閉・呼吸苦あり.

【検査所見】WBC 13600/ μ l (Bas 0.0, Eos 39.5, Lym 0.5, Mon 0.5), RBC 450万/ μ l, Hb 13.8g/dl, plt 19.6万/ μ l, CRP 8.27, ESR 76mm/h, BUN 10.3mg/dl, Cre 0.6mg/dl, Na 127.3meq/l, K 3.93mEq/l, Cl 93.9mEq/l, GOT 72 IU/l, GPT 222 IU/l, ALP 1032 IU/l, LDH 284 IU/l, IgE 2091 杉(2+) その他陽性項目なし.

胸部X線・CT: 異常所見なし, 副鼻腔CT: 篩骨洞から上顎洞に粘膜肥厚, 心エコー: 異常所見なし.

【経過】mPSL80mg投与継続するも症状改善せず, 37℃台の微熱が続いていた. 8/12好酸球39.5% (WBC13600) と高値あり Churg-Strauss 症候群疑いにてステロイドパルス療法を開始した. パルス開始後すぐに症状改善し, ステロイド漸減後も症状再燃なく9/3退院となった. 皮膚生検では Churg-Strauss 症候群 (AGA) に特異的な所見は得られなかった.

5 当院における胸膜悪性中皮腫の検討

藤田 七恵・鈴木 涼子・梶原 大季

杵淵 進一・松本 尚也・桑原 克弘

宮尾 浩美・齋藤 泰晴・大平 徹郎

国立病院機構西新潟中央病院呼吸器内科

【目的】今後, 悪性中皮腫の増加が予想されている. そこで当院における中皮腫の現況を検討した.

【方法】2007年1月以降, 当院にて胸膜悪性中皮腫と診断もしくは疑われ入院した症例22例を対象に, レトロスペクティブに臨床的検討を行った.

【結果】男性19例・女性3例. 平均診断時年齢は67歳. 石綿吸入歴が明らかなのは12/22例(54.5%)であり, 発症までの平均年月は44年であった. 診断方法は, 胸水細胞診では1/17例しか診断つかず, 17例に胸腔鏡下胸膜生検が行われたが, 生検を行っても診断がつかないものが3例あった. 積極的治療として, 化学療法が16例(うち2例は手術療法も併用)に行われ, SD~CRの効果判定であったものが12例あった. 全経過を観察し得た15例のうち(経過観察期間2~42ヶ月), 生存期間平均値は, 化学療法なしが7ヶ月, ありが23ヶ月で, あった. また肉腫・二相型は, 治療の有無に関わらず, 予後が悪い傾向にあった.

【結語】当院では, 2007年1月のペメトレキセド発売後, 積極的に加療を行っているが予後は厳しく, 今後さらに症例を蓄積して, 診断・治療戦略を検討する必要があると思われる.

6 発作性交感神経機能亢進 (PSH; paroxysmal sympathetic hyperactivity) を伴った top of the basilar syndrome の66歳男性例

田村 智・竹島 明・荒川 博之

赤岩 靖久・西澤 正豊

新潟大学医学総合病院神経内科

症例は66歳, 男性. 突然の意識障害, 四肢麻痺, 対光反射消失, 眼球運動障害を呈した. 頭部MRI・MRAにて中脳, 左小脳, 両側視床から視